4

イセリア英雄戦記

the legend of the Heroes war

立ち読み版

編集 二次元ドリームマガジン編集部

挿絵 牡丹

第13話　女王の枷――本文担当：空蝉　007
第14話　被虐姫破瓜画――本文担当：千夜詠　059
第15話　絶望の種、蒔かれる――本文担当：木森山水道　109
第16話　恥辱の受胎王女――本文担当：あらおし悠　169
Bonus Track　223

登場人物紹介

Characters

セリーヌ=アヴァリアレス

イセリア英雄公国の騎士。外交も任され、王女からは絶大な信頼を与っている。お菓子作りが趣味という可愛らしい一面も。

フィオナ=ブリティッシュ

イセリア英雄公国の王女。少し世間知らずなところがあるが、幼馴染みのセリーヌのことをとても大切に想っている。

リア

イセリア諜報部隊「クロウ」に所属する暗殺者。仲間の前では無邪気な姿を見せる。

アリオナ=ブリティッシュ

イセリア英雄公国の現女王であり、フィオナの母親。メイズの瘴気にあてられていたため、病に臥せっていた。

エルス=M(マイハ)=アムデルト

イセリアの第三騎士団団長を務める貴族令嬢。聖なる槍《セルフェザー》と特殊能力《マイハ反応》を使う。

レーシア=スカール

第三騎士団の副団長を務める少女。エルスを「お姉様」と慕っている。

ギュスターヴ

バーンドベルグ帝国の皇帝。元は宰相だったが、前皇帝が没した際に事後を任され、皇帝の座に就いた。ギュスターヴというのは通り名で、本名はベリアルド=オーギュスタン。

ウォルガード=オーギュスタン

バーンドベルグ帝国の将軍。傲岸不遜な性格ながらも、戦いにおいては真摯で、正々堂々真正面から勝って蹂躙するのを好む。オーギュスタン家の嫡子。

メイベルローゼ=オーギュスタン

バーンドベルグ帝国の皇帝ギュスターヴの末姫。あらゆる者の意識はそのままに、肉体を思うままに操れる『服従魔眼』を持つ。

メイヴェン=ネルクバイル

滅びの都アヴァルスに館を構える、吸血鬼にして凄腕の死霊使い。『真祖』と呼ばれる存在で、絶大な魔力で様々な秘術や禁呪を使う。

氷継(ヒツギ)

フェイエン王家に仕える女執事。アイマスクをつけているが、気の流れを読み取る「心眼」で外界の状況を察している。

スレア=エターム

メイズⅦ内でアリオナとエルスが出会った、最上級の「魔導具」を作る錬金術師。しかしその正体は……!?

イセリア英雄戦記とは?

二次元ドリームマガジン史上初の超長期連載&読者参加型のリレー小説!

読者の参加によって物語が展開する。

A. ○○ルート
B. △△ルート

読者の投票で展開が変化!

A. ○○ルート
B. △△ルート

雑誌連載時には、本文中に選択肢が設けられています。アンケートハガキで「どちらが読みたいか」を投票していただき、より多くの支持を受けた選択肢に沿って物語が展開していきます。また、外伝小説やオリジナルキャラクターを投稿することで、読者の皆さまで『イセリア英雄戦記』を作る楽しみを味わってください。

※選択肢は雑誌掲載版のみで、単行本では選択肢は削られています。ご了承ください。

◉さらに読者の作ったキャラも!?

リレー小説形式での超長期連載

第13話 空蝉先生 → 第14話 千夜詠先生 → 第15話 木森山水道先生 → 第16話 あらおし悠先生 ……

今巻では第13話は空蝉先生、第14話は千夜詠先生、第15話は木森山水道先生、第16話はあらおし悠先生と、1話ごとに本文を執筆する作家が変わります。また、連載回数が28回(2013年10月現在)を超える超長期連載によって、ヒロインたちがいつ堕ちるのかが予想できなくなっています。一話ごとに雰囲気が変わる文章や、いつ堕ちるかわからない緊迫感をお楽しみください。

※本作品の世界観および設定は、竹内けん先生に作っていただいたものをもとに、本編を執筆いただいた各作家さんと読者の皆様の意見で構成されております。

公式サイトでさらに楽しく!

読者による投稿小説や投稿キャラクターが公開されている公式サイトでさらに『イセリア英雄戦記』を楽しめます。登場キャラクターのスリーサイズや国の設定などもまとめられており、現在行っている人気キャラクター投票などのWebコンテンツも今後、他のコンテンツを追加予定です。

『イセリア英雄戦記』公式サイト http://ktcom.jp/icerya/

脳髄が痺れて、キーンと耳鳴りがした。真っ白に思考が染め上げられて、心地よい快楽の熱に包まれている。

上気する肌と、周囲から立ち昇る尿水の湯気。羞恥だけでアクメを味わった英雄国の姫君は、この姿がどのように描かれるのかを考えただけで、また肉壺を疼かせる。

「ふははは、あーははっ、いやらしすぎる牝め。屈服させてから、と思うておったが、もう我慢できん」

巻き込まれた縄が逆回転して、ぐったりと揺られる王女の背後にでっぷりとしたお腹が近づく。

虚ろになりかけた瞳でチラリと見やると、表情は瞬間に強張った。

「ヒ……っ、お、お願いです。そ、それだけは……」

巨木があった。剥き出しにされたギュスターヴの肉棒は、棍棒のような太さと硬さを視覚に感じさせ、先端はより膨らみきって黒々と光沢している。何を目的としているか、これまでのメイベルローゼの話などから十分に察しはついた。

「いい加減に、観念したらどう？　しょうべん垂れながらイっちゃった変態豚さん」

静観を決めていた魔眼姫が楽しそうに口を挟む。

「う……っ、で、でもこれだけは……、お願いです。どんな恥ずかしいことでもします。街中で、オ、オナニーしろって言われれば……しますから。だから……」

「やだアンタ。そんなこと考えてたの？　そんなの、変態露出狂を喜ばせるだけじゃない」
実際、まだ知らぬセックスの悦びよりも羞恥の辱めのほうがドキドキしてしまう。だがそうまでしても守らなくてはならないのも、また事実だ。
「へ……変態です。わたくし、羞恥好きの露出変態です。だから、セックスよりも、ひゃっ！」
脂ぎったような手が汗ばんだ新雪のような白いお尻を撫で回してくる。
「もう、待てんのだよ。こうまで見せつけられてはな。何、すぐに膣と子宮でイキまくる淫乱にしてやる」
年齢を感じさせぬほどにいきり立った肉棒の先端が、ぐぢゅっ、と淫蜜と小水で濡れきったワレメを圧してきた。
「や……、やめて……」
「さあ、英雄の誕生を描いてもらうとしようか」
純潔を捧げた相手に生涯仕えなければいけない。初めて少女から大人の女へと成長の発現があったその日、アリオナから教えられた絶対の理。だが皇帝の言った英雄の誕生とは？ただ今は、こんな男にだけは与えたくないという想いで精いっぱいだ。
「くっ、うう……オ、オチンチンっ、は、入って……ダメぇえええっ！」
ぬぶっ！　十分すぎるほどに潤滑液に溢れて、牝汁が飛沫を上げる。肉ビラが割り開かれ、猛烈な圧迫に怖気を憶えた。

「膜に触っているのがわかるか？　ほれ、もう一押し……」
柔肌に脂汗が滲んで、眉をきつくひそめた。いやいやするように首を横に振って、耐えられないほどの絶望感に気が変になりそうだ。
「た、助けて……」
繊細な膣孔に焼印を押されたような苦痛が走る。
「ヒ……ぅギっ……」
みしみしと牝肉が引き裂かれて、強引に捻じ込まれてしまう。
ぢゅぶっ！　ぬずず……。アクメに達したばかりの蕩けた卑肉であるのに、獰猛な男根に軋み泣かされる。
ずっぷっ！　涙を溢れさせた瞳を見開いた。
「いやぁあああ――ッ！」
苛烈な圧迫感が脳天に叩き込まれたその時、牝汁とともに鮮血が飛び散った。イセリア英雄公国第一王位継承者フィオナ＝ブリティッシュの純潔がとうとう破られた瞬間である。
「おお、悲劇とエロス、嗜虐と被虐の融合……。まさしく芸術。描くぞ。一世一代の傑作を」
「泣き叫ぶ顔の何と官能的なことか。汗ばんだいやらしい肌の質感、滑り光沢する陰部、激しい抜き差しの様子まで私が完全に再現してみせようぞ」
創作意欲をかき立てられる異様な興奮に包まれ、絵師らの筆が休まることはない。

（ああ、悪夢だわ。こ、こんな、ひどすぎる。うぐ……っ）
下腹部を内から苛む痛みが現実だと教えてくる。
「ははは、とうとう、我がものとしたぞ。ふお……ぉ、何という心地よさか。やはり、ワシの目に狂いはなかった」
「う……うう、あ、貴方は、鬼畜だわ。っ……ぬ、抜いて……」
ずぶずぶと肉棒を淫蜜の溢れた膣内に侵攻させて、温かく噛み締めてくる粘膜肉の感触に惚けた顔を見せるギュスターヴ。初めて男を受け入れた肉壺は、反発して拒むようにきつく締めつけ、それでもヌチャヌチャと媚びるように内ビラが舐め回してくる。
「ヒギい……っ、奥に、入れないで……ぇ。痛い……ぃ」
ぷるぷると肢体を震わせるフィオナ。中から拡張される激痛で、メリメリと音を立てるように繊細な粘膜が苛まれた。それなのに意識の半分は、自分を見詰め、強姦される姿を描いている絵師らに向かってしまう。
（ふあ、ぁ……こんな、みじめな姿まで……。これが、もし、セリーヌたちの目に止まることになったら……）
もはや生きてはいられないほどの辱めである。震える唇を噛み締め、舌を伸ばし、誇りを取り戻そうと覚悟を決めたその時、
「あはは、いいざまね。アンタのそのドスケベな姿を描いた絵を見て、大陸中の男がセンズリをこくのよ」

メイベルローゼの発した言葉に、痛みに一度収束しかけた羞恥快感の炎が燃え上がる。
「はあああ、わ、わたくし、世界中で、いやらしい対象にされちゃうぅうう」
膣肉が急速に弛緩した。痛みはまだあったが、それすら被虐の悦楽へと変換されていく。
ぬぶっ！　ぬっぷ、ぬっぷ……っ。飽食皇帝の肉棒が果敢に前後に振られ、牝肉の蹂躙を開始した。
「ふん、ふんっ、す、素晴らしいぞ、フィオナ。一突きごとに、おお、力が湧いてくるようだわ」
ねっちょりと膣壁が肉棒に張りつき、たぷんと肉付いたお尻が甘えるように揺らされる。カリ首に蜜壺のヒダヒダが捏ねられると、甘い痺れが駆け巡り、ぐちょぐちょと淫蜜が噴き出した。
「ふひゃっ！　ひいっ、ひいいっ！　痛いのに、悔しいのにっ……どうして……」
先ほどまでの苦痛が信じられないくらいに快感に変わっていた。
蜜壺をかき回されるごとに、閉じられなくなった唇から涎がだらだら漏れてしまう。乱れれば乱れるほど、それが描かれてしまうというのに、意識すると余計に興奮が上積みされていった。
「くうっ、信じられないくらいに吸いついてきよる。これまでで一番ドスケベなオマンコだな」
激しい突き込みに球状に膨らませられた乳房がたぷたぷと揺れる。

「ドスケベなんて、そんな……くはっ、いやっ、いやあっ……」
ギシギシと縄が鳴って、そこに乳肉の汗が飛び散った。
「ぅヒっ、ヒイっ――っ、もう、やめれ、オチンチンっ、よ、よくなっひゃうぅうう！」
肉棒を受け入れてよがり狂う女の姿を何度も見せつけられてきた。そして初めて知ってしまう。乳房で感じてしまった時以上の充実感と満足感が膣には溢れてくるということを。
「もう感じてきたか。初めてなのに、犯されて気持ちよくなるとは、とんでもない淫乱の変態だったな。のう、マゾ豚の王女よ」
パンっ！　パンっ！　とお尻を叩かれて、火照りきった肉からゾクゾクと魔悦が溢れてくる。
「ち、違うぅうう……マゾなんかりゃない。ひがうっ、ヒっ、ぁ……」
三百六十度の視姦の刺激と、初めての膣の性感に思考が激しく揺さ振られている。切なげな食い縛るような顔が、徐々にとろんと瞼の下りたアへる表情となって、だらしなく濡れた舌を突き出していた。
「らめえっ……オマンコっ、蕩けちゃうぅうう。ズボズボしゃれて、ぐちゃぐちゃに壊されひゃうう！」
未経験の刺激に翻弄されて、自分の状況すら判断できないくらいに飛んでいく。全身が朱色に染まり、揺さ振られる股間の肉花弁は充血しきって、どっと身体中から汗を噴き出した。淫靡で猥褻な牝の芳香を濃厚に放って、勝手に肉壺がきゅるきゅると男根を締めつ

けていく。
「むふう、このギュスターヴの精が搾り取られそうだわい。むむ、まさに、天性の精液便所だな、フィオナは！」
全身の力が抜けて、勝手に男を貪る腰。姦られるだけの肉の王女。
（精液便器……。わたくしが、ああ、もうこのまま、堕ちていくしかないというの？　ふあ、はああ……）
尻孔も尿口も緩みきって、プシャっ、シャ――っ、とまた失禁していた。
「あはは、しょんべん垂らしながら、イってしまいなさいよ、この恥ずかしい変態王女！」
メイベルローゼの言葉に、ようやく状態に気づいても、もはやその恥ずかしさは、絶頂へと導くきっかけにしかならない。誰よりも気高く気品溢れた王女が、憎むべき敵国の皇帝に犯されながら失禁して淫乱に腰を乱しているのだ。
「ひゃひいっ、恥ずかひいの、気持ひい……らめっ、らめなのぉっ。……ィっ、イイっ……。まっひろになっ……っぐう」
残る微かな理性で快楽を押さえ込もうと躍起になる。だがそれも刹那の間。猛り狂った牡棒を相手にしては、破廉恥に尻を揺らしていやらしい敗北宣言をしてしまう。
ぬぶぶっ！　ぬっぶ、ぬぷぬぷっ！　年齢を超越した苛烈なピストンが一段と激しくなって、脂ぎった腹がむちむち揺れる尻肉を叩く。姦られて蕩ける感覚と犯されている被虐が増大した。どろどろ混じって狂って乱れる。

「うおっ、オマンコが絡みついて、ワシが、持っていかれる。さ、さあっ、注ぎ込んでやるぞ。ふぬっ！」
「んっ、ああっ、な、中はいやぁああっ！　許ひてえっ、ゆるぅううっ」
快楽に染め上げられていく昇天を愉悦していく。うねりくる悦波が脳内に吹き荒れ、牝の本能だけで絶頂を求めて腰を何度もくねらせた。
「ならば、服従を誓うか？　ワシは、どっちでもいいのだぞ！」
最後の尊厳を振り絞る。
「い、いやぁ、ぁ……、服従なんれ、れきない……」
「あいわかったぞ。ワシの精液がそんなに欲しいか。はあ、ははっ」
ぐぐっと膣の中で肉棒がいっそう大きくなって、子宮口に叩き込まれてくる。その衝撃の痛みが、刹那に快感への刺激となった瞬間、
「あぐっ、おとっ、堕とひゃないで……。っヒ……ぃ、恥辱牝ううっ、イク、イクっ――っ、イっひゃうううう！」
ドピュルルッ！　ドブドブッ！
肉壺を強烈にほじくり回すように強張りが暴れ回り、大量の精液が注ぎ込まれた。溶岩のような腐液が王女の膣内を満たし、子宮に雪崩（なだ）れ込んで、背徳の極みに白目を剥いた。
「あ、あひゅいィいいっ！　にゃかにっ、ドロドロっ、入ってえっ……、オマンコっ、溶けるぅううう！」

しつこく舌で擦られる快感でペニスが何度も跳ね、アリオナの唇や頬を打った。
「いいぞ、その調子で続けろ。チンポ美味しいと言え」
「ちゅ、は、はい、はふっ、ちゅる……ち、ひんぽおいひいれす、ジュルルッ」
汚根に触れるのも卑語を言うのも嫌だったが、アリオナは微笑みを保ち続けた。
「あぁ、たまらん……お前の口も顔もいやらしすぎるぞ……オオっ……！」
太腿を粘っこく震わせながら、ガルデオが告げる。竿でビクビク脈打つ血管が、アリオナを犯したくてたまらないという魔物の心情を代弁している風だった。
ズクン……ズクン……。
（……え……膣が……）
喜悦で震える巨根を見ながら舌で清拭（せいしき）していると、胸と膣に甘い疼きが走り出した。
（まさか……私は魔物のペニスを欲しがっているの……？）
膣のこんな反応は『子宮枷』相手には感じたことがないものの、愛夫と閨をともにしていた時に憶えがある。
（相手は敵……下劣な魔物なのに）
自分に言い聞かせる風に思っても淫反応は止まらない。心臓がトクントクンと心地よく早鐘を打ち、淫らな興奮の汗が珠の肌を覆っていく。
「はぁぁ……い、卑しい牝奴隷のアリオナが……綺麗にいたしました」
臍近くまで反り返る剛棒は、亀頭の先から根元まで、アリオナの唾液でヌラヌラと鈍く

光っている。見ていると奇妙な達成感を憶え、親近感が湧き、嫌悪が薄れていく。
（私の唾液塗れの魔物ペニス……ああっ、なんて立派で卑猥なの？）
立ちのぼる蒸気にこもるにおいには、アリオナの唾液と甘い口臭、それにガルデオの肉棒臭が混ざっていた。嗅いでいるだけで頭がクラクラし、女王の膣はキュンと疼く。
「背中を向けて跨がれ。お前の女王マンコに、魔物チンポのよさを味わわせてやる」
そそり勃つ剛棒からジクジク先走り汁を漏らしながら、魔物は命じた。
（こんなにお汁を垂らして、私の中に入りたがっているペニスを入れるの……女王なのに魔物ペニスを……世継ぎを宿す大事な場所に受け入れなくてはならないの？）
ドクン……ドクン……。
おののくアリオナ。だが、同時に甘い胸の高鳴りが起こる。
（女王と魔物が性交するなど、決して許されないことよ……あぁ、でも……この魔物ペニスと繋がったら、どれほどの快感を味わうことになるのかしら……きっと、あの人と娘を……フィオナを作ったセックス以上の快楽を体験するのではないかしら……）
女の魂に埋め込まれている生殖本能――逞しい牡棒との交尾願望がむくむくと頭をもたげてくる。
長い間『子宮枷』によって性的快感はたっぷり味わわされてきたが、肉棒による悦楽はご無沙汰だった。そのせいか、眼前のペニスに心身が落ち着かない。
アリオナ＝ブリティッシュが慈愛に満ちた人格者であり、大魔法使いらしい強靭な精神

力を持つ人間なのは疑いようのないことだが、だからといって肉欲と無縁ではない。
（魔物とのセックスなど不本意だけれど……ごくっ……国のために拒めないのだから）
女王は、言い訳めいた台詞を胸中で繰り返す。飽くまで仕方なくと言い張るその顔はすっかり上気して、瞳には欲望の色が見え隠れしている。
アリオナはゆっくり肘掛けによじ登ると、はしたないガニ股になった。両手を敵の膝に添えてバランスを取り、分厚くて広い魔物の背中になめらかな背中を預ける。
あられもない大開脚をしたせいで、充血して厚みを増した大陰唇が、物欲しそうに開閉する様子が丸見えになり、汗と愛液が混ざった甘酸っぱいにおいが立ち込めた。
秘裂からはトロトロの愛液が滝のように流れ、そそり勃つペニスの先端に降り注ぐ。
犬の『お座り』を行儀よくしていただけに、太腿もベトベトに汚れていた。
「俺様のチンポを舐めただけで発情していたとは……くくく、今ラクにしてやる。ゆっくり腰を下ろせ」
（あぁっ、私は魔物相手にこんなはしたなく……でも、仕方ないのだから）
ガルデオの指摘はアリオナの良心にグサリと突き刺さったが、そんな痛みでは女王の興奮は霧散しなかった。反対に妖しいときめきが濃くなっていく。空虚な膣内が淫らに火照り、蜜でグチョ濡れした柔ヒダのすべてが、切なげにキュンキュン疼く。
「牝奴隷のアリオナは、ガルデオ様の魔物オチンポをハめさせていただきます……」
スレアに教えられた卑語を口走ると、頭の中が恍惚で白んだ。後頭部がふわりと軽くな

り、身体がカッと熱くなる。許されない陶酔の中、アリオナは少しずつ腰を沈める。
にゅちゃ……じゅぶぶぶ……じゅぶぅぅぅぅ……。
厚い花弁を内側に巻き込みながら、使い込まれた汚らしい亀頭が入口を突破した。
熟成されて谷間の深い肉ヒダを捲り返しながら、カリがじわじわ進む。
灼熱を帯びる亀頭は媚肉を容赦なく灼き、魔物と性交している実感を刻んでくる。
「ああっ……ぁ……これ、す、ごいっ、はあっ、ぁあアア～～～ンンン……っっ!!」
びっしょり汗をかきながら、女王アリオナがソプラノの恥声を張り上げる。
白い美肌には赤みが差し、うなじから脇腹にかけて粘っこく痙攣。魔物の肉棒を咥え込み、輪郭に沿って丸く広がった肉厚秘唇からは、どっと愛液が漏れてきた。
「うぉっ、こりゃぁミミズ千匹か！　ブラシみてーに高いヒダが、チンポの隅々に絡みついて……マン汁でぬかるんでるからハメ心地も最高だ……オラ、もっと咥えろ！」
挿入快感に我を忘れたガルデオが、細腰を掴んでじわじわ下げる。
「あぁっ、熱いっ、太いぃっ……奥まで入ってくるぅっ……んんっンン～～！」
膣内までもが化け物の肉棒の形に広がっていく。カリで肉ヒダを捲り返される度、電撃じみた鋭い快感が背筋を貫き、牡肉でみっちり満たされる充足感が湧いてくる。
ズンッ!!!
「あぁっ、ああぁっ……ンあぁンンッ～～～!!!」
子宮口を押し上げられた瞬間、アリオナの顎が上がり、咽笛が晒された。金の首飾りを

押しのけながら乳房がブルンッと宙を舞い、汗が散る。
「あぁ……はあ、はあ……お、奥まで……産まれた時、フィオナが出てきた場所まで届いて……んふぅっ……こんなにいっぱいになったのは、初めて……」
下腹では厚い肉花弁が目いっぱい広がっていた。ドクドク脈打つ極太竿を、噛みつくように咥え込んでいる。隙間から止め処なく漏れる愛液が、ペニスをヌラヌラに染め上げて、甘酸っぱいにおいで包み込んでいた。
（ぁ……すごい……お腹がいっぱいで気持ちいい……あの人のペニス以上に、私の膣を内側からグイグイ押してきて……自分の形に変えようとしている）
清らかな魂をも蕩かせるドス黒い快感が女王の身体を満たしていく。
悪戯者の『子宮枷』や亡夫のペニスを超える圧倒的な存在感は、女の悦びをこれでもかと言うほど教えてくる。
鼻先で何度も火花が飛び散り、膣内がジンジン疼く。挿入したままなのが焦れったくて、早く抜き差しをしてくださいと催促しそうになってしまう。
「入れただけでうっとりしやがって……この欲求不満女王め！　デカパイが膨らんで乳首もビンビンじゃねぇか」
ガルデオは、のろく腰を突き上げながら、片手で釣鐘型の爆乳を鷲掴みにした。
「サイズはいくらだ、ん？」
手からはみ出す肉釣鐘を荒々しく揉みながら訊ねる。乳玉は弾力よりも柔らかさが勝っ

ていた。魔物の指をどこまでも受け入れ、手のひら全体に蕩けそうな快感を与える。
「はぁ、あぁっ、きゅ、きゅうじゅうななです……ああっンん……！」
ギュッと握られるだけで甘く息が詰まる。指の谷間から覗く鴇色の乳首がビクンビクンと律動し、桃色がかった乳肌が断続的に引き攣っていた。平素では絶対に口にしない言葉も、巨根の魔快楽と迸る乳悦で頭が霞がかっているせいで、出てしまう。
「ぐへへ、魔物なんかにそんなことまで教えやがって……おっ、膣が締まりやがる……まるで、俺の精液を搾り取りたくてたまらないって感じだぜ……イクのか、牝奴隷よぉ」
「あぁあ……は、はい……牝奴隷のアリオナは、ンっ、イきそうで、ぁン」
（アソコが……はあ、はあ、オマンコが疼いてもう我慢できない……）
焦点の合わない目で宙空を見る女王は命令されてもいないのに、緩く腰を使い出す。
ジュズッ……ジュボッ！　ズズッ、ジュブブブ、ジュブン、ジュブッ！
アリオナの積極性にガルデオが合わせ、魔物と女王は息を合わせて睦みあう。
腰巻の飾りがカチャカチャやかましく鳴り、結合部からぶしゃぶしゃ愛液が散る。ふたりの下腹部も太腿も、互いの汗と汁で染まる。
「あぁっ、すごいっ、いいっ、あンっ、イクっ、イキそうっ、んあぁぁッ！」
（『子宮枷』よりも、フィオナを作ったあの人とのセックスよりも気持ちいぃっっ）
亡夫や『子宮枷』では味わえなかった深く鮮烈な快感に、アリオナはすっかり夢中になり、慎ましい女王とは思えないほど淫猥に腰を振っていた。

「オラッ、出すぞ牝奴隷っ、子種汁を注がれてイケっ、孕ませてやるっ！」
最高潮に勃起させた肉棒で女壺を揺す振り、溢れる先走り汁を蜜肉に染み込ませるガルデオが吼えた。
「はぁ、えっ？　だ、だめですっ、は、孕むのはっ、魔物の子供だけは、んああっ！」
魔物の孕ませ発言で、あってはならない事態を思い出し、いやいやと髪を振り乱す。
膣内射精されるために牝奴隷を演じているとは言え、宣言されると恐怖を憶えた。
不自由な体勢のアリオナだったが、魔物から逃れようと身を捩る。
「うるせぇ！　今までうっとりしていたスケベ女王が言うことかよ！　お前の子供は……王女の妹か弟は、俺様が仕込んだ種でできたモンスターのガキになるんだよ！」
アリオナの倍以上の体格の魔物は、嫌がる女王の腰をガッシリ掴み、強引に続けた。
敏感な蜜ヒダが高いカリで擦り抜かれ、最後に子宮口を勢いよく押し上げられる。
「あっ、あっ、ああン、だ、ダメ、です、ああ、そんな風に激しくされたら……ああ、感じすぎてしまう……ああン、オマンコ疼いて、子種が欲しくなってしまうっ」
雄々しく抜き差しされる度、鼻先で何度も火花が散り、膣が魔物ペニスを締める。
「ウヘヘ、身体は正直だぞ？　孕ませてくださいって、チンポをしゃぶりやがる！」
ガルデオは突き上げた拍子にアリオナの両膝の裏を肘掛けに落とした。荒々しく爆乳の片方を揉みしだき、
「ハァッ、ハァッ、イセリアの連中が見ている前で魔物の王子か王女を孕めぇッ！」

第１６話　恥辱の受胎王女

「もっとしっかり咥えて、舌を絡めんか。……おおぅっ、そうだ……うっほぉ……やれば、できるではないか」

唇に触れる肉の感触。血管のゴツゴツが気持ち悪い。なのに、なぜか吐き出す気にならなかった。毛深い太腿に手を置き、夢中で口腔に捻り込む。

「うっく……うえっ、むぐぅ……！」

大きく張り出したカリ首に舌先を這わせる。それが気に入ったのか、ギュスターヴは小さく呻きながら、褒美を与えるように髪を撫でた。

（ヒッ――!?）

ざわっと背中が総毛立つ。好きでもない男にされて嬉しいはずがない。なのに、理性では嫌悪しているのに、身体が歓喜で小刻みに震える。

（い、今のは……？）

きっと、虫唾が走ったのを錯覚しただけ。そう自分に言い聞かせ、改めて醜い肉棒に舌を這わせた。

「はぁむっ……ちゅ、ちゅぱっ……」

肉幹に舌で唾液を塗りつける。亀頭を咥えて先走り液を啜る。いつしか奉仕は熱を帯び、相手を悦ばせることで頭がいっぱいになっていく。

だがこんな恥辱の奉仕も、皇帝の企みの、ほんの入口に過ぎなかった。

「ぐふふっ……。ところで客人。先ほどこの者たちが飲んだ酒だが……ちょっとばかり面

白い代物でしてな」
皇帝にならってペニスを舐めさせていた男たちが、呼びかけに応じて快感に惚けた顔を上げた。
「四つはただの酒。だが残りのひとつは、排卵をうながし、確実に孕むことのできる、グラマトンの秘薬なのだよ」
愉快そうなギュスターヴに、男も女も動揺でどよめいた。フィオナもペニスを咥えたまま衝撃で目を見開く。
「どうだろう。女どもを一斉に犯し、孕んだ者が勝ちというのは」
「な……何を馬鹿な……っ！」
唾液を飛ばして顔を上げたフィオナを、ギュスターヴは一瞥もくれずに押し戻し、再び肉棒を捻じ込まれた。
「し、しかしギュスターヴ候。女が孕んだなど、見た目ではわかりません」
「心配いらん。むふふっ、この薬には面白い副作用があってな……受精と同時に乳を噴くのだ」
それで、孕んだかどうか一目瞭然というわけだ。
「どうだろう。これで賭けをしてみんか。見事女を孕ませた者には、望むままの褒美をくれてやろう！」
そんな――フィオナは戦慄した。薬で、しかも、そんなふざけたゲームで女を孕ませよ

うなんて。だが二心を抱えた者に、ルールなど関係ない。
「……犯せ」
皇帝の一言が合図になって、男たちは一斉に少女たちに襲いかかった。床に押し倒す者。四つん這いにさせ、背後から挑みかかる者。
「や、やめてっ、挿れないでぇっ！」
その声に答える者はない。無情な肉棒が、女性器にめり込んでいくのみ。
ず……ずずず、ずぶっ、ずぶる！
「いやっ、妊娠いやぁぁっ！」
肉の交わる音。広間に響く、耳を塞ぎたくなるような少女たちの悲鳴。
「お……おやめください！」
フィオナは皇帝の腰にすがり、中止するよう懇願した。もう、女性が嬲られるのを見るのは耐えられない。
「何を勘違いしておる。お前も、ゲームの駒のひとつなのだぞ？」
冷淡な事実に、ゾッとなった。そうだ。妊娠薬を飲んだのは自分かもしれないのだ。まるで、すでに孕んだような錯覚に、身体の奥で子宮が疼く。
「だが、ワシにも慈悲はある。この中で誰よりも早くワシを射精させられれば……ゲームを中断せんでもない」
「そ……そんな……」

「どうした、ん？　早くせぬと、女どもの腹に子種がぶち撒かれるぞ」
彼の言う通り、男たちの腰振りがヒートアップしている。躊躇していられない。フィオナは焦り、愛撫を催促する淫棒に、無我夢中で吸いついた。
「んっ、むぅッ！」
不快な生温かさに眉をひそめる。しかし、胸まで染み込むガマン汁のにおいを吸い込んでいるうち、フィオナの身体に変化が生じ始めた。
「はぁ……あ、はぁぁぁ……ん、ちゅっ、ちゅぱ、じゅぱちゅッ……」
視界がぼやける。ブラに擦れた胸の先も、痛いほど硬くなってくる。
それだけではない。肉棒から唇が離せない。もっと頬張りたい欲求が、もっと気持ちよくさせたい衝動が、脚の間から湧き上がる。処女を奪ったペニスの味が、子宮を切なく疼かせる。
（あ、はぁぁ……わたくし、どうしてしまったの……？）
身体に、何か異変が起きている。その正体を確かめる術もなく、フィオナは被虐の悦びに身悶えした。
（ンふぁぁ……おっぱい、ジンジンして……は、あぁぁ……ンッ！）
まるで、胸の疼きを見透かしたように、男の手がブラを毟り取った。重そうに揺れながら飛び出すむっちりバスト。隠す間も身を捩る間もなく、大きな手のひらに揉みしだかれる。

「ふぉっはは。どうした、こんなに乳首を硬くしおって」
「そ、そんなことは……んンッ!!」
尖った乳首をキュッと抓られた。激痛に背中を仰け反らせる。だがフェラチオはやめられない。フィオナは乳首の痛みを紛らわせるように、夢中でペニスを吸い続けた。
じゅぶ、れろれろ、チュれろん!
胸の甘い痺れに身悶えしながら、唇でペニスを扱く。亀頭の丸みを舌先でなぞる。血管が浮き出た肉幹に、吸いつくようなキスを与える。処女を奪われて以来、心ならずも仕込まれたテクニックを駆使し、憎き男を悦ばせた。
「お……おほぉ、いいぞフィオナっ。だがこの程度では……ワシを射精させられん……ぞ!」
「あ、あぁ……そんな……」
余裕を見せるギュスターヴに、慌てた唇で激しく擦る。しかし焦るほど愛撫は雑になり、射精の気配が遠のいていく。フィオナは唇の端から涎を垂らしながら、周囲に視線を走らせた。
「いやぁっ! やめてぇぇッ!」
「中で出さないでぇ!」
切迫した少女たちの声。このままでは確実に、誰かが望まぬ子を孕まされてしまう。
「おお、あやつらなど、じきに終わりそうな気配だぞ。お前も、そろそろこちらを使う頃

合いではないか、な！」
「はぁぁうッ！」
ギュスターヴの靴先が恥裂に刺さった。恥肉をえぐり、挿入を催促する。
（でも……ああ、でも……！）
確かに、付け焼刃の口唇愛撫ではもう限界。でも肉棒に胎内をまさぐられる、あの屈辱的な感覚は、もう二度と味わいたくない。
――出すぞ、お前の中に！
――やめてぇぇぇぇ！
だが、少女たちの悲鳴がフィオナを急かした。慌ててスカートをたくし上げ、瞬間、獣欲剥き出しの男と目が合い我に返る。
「ふっ、早くせぬと間に合わんぞ？」
「は……はい……」
悲しみに胸を潰されそうになりながら男の腰に跨がる。そそり勃つ肉棒を、震える指で自らの秘裂にあてがう。
「あ……くっ」
悔しさで、涙が零れそうだ。これは人助け。そう自分に言い聞かせ、歯を食い縛って腰を落とす。
「は、あ……入って……早く……」

少女たちを救いたい一心で呟いた、その言葉を皇帝は誤解した。
「おおう⁉　そんなにワシのチンポが欲しいか！　いい子だ、ほぉれ！」
「え？　違……あ、あぁぁッ！」
ずぶっ、ずぶぶぶッ！
腰を掴まれて、剛直が一気に奥まで突き刺さる。カリ首に膣ヒダを擦られ背中が痺れる。腰が跳ねた拍子に、咥えた肉棒を陰唇で扱いてしまう。
「おほぅ、お前のまんこが、ワシを美味そうにしゃぶりおる！」
「ち、違いますっ、わたくしはそんな……ひぁぁッ、ふ、太いひィィッ⁉」
極太勃起で身体を裂かれそうだ。しかし彼は動こうとしない。動かなければ射精させられない。フィオナは男の首に抱きつき、腰をくねらせた。
じゅぶ、じゅぶ。カリ首に膣ヒダを削がれるような感覚に鳥肌が立つ。眉をひそめ、恥辱に胸を疼かせ、それでも屈辱的な肉棒奉仕に励む。
「もっと楽しそうな顔をせんか。言ってみよ。ギュスターヴ様のチンポで私のマンコが悦んでおりますと」
「そ……そのようなこと……」
いやいやと首を振る。しかし彼は、好色にして非情な皇帝。耳朶を舐めながら、卑猥な声でささやきかける。
「――お前は、ワシのものだ」

「あ……あぁぁ……」
それは、まるで呪文のように、絶望に沈むフィオナの心を蝕んだ。拒みたい。認めたくない。なのに、唇が勝手に動く。望まぬ言葉を紡ぎ出す。
「わ……わたくしの、がぁ……ギュスターヴ、様の……」
「もっと！　はっきりだ！」
「ギュ……ギュスターヴ様のおちんちん、欲しい……ッ！　おまんこグチュグチュして、苛めてぇっ！」
自分の言葉で頭が焼き切れそうだ。切なげに身を捩り、羞恥から逃れるように卑語を叫び続ける。
（は、恥ずかしい……ッ。身体が燃えてしまいそう……！）
そう思った時、フィオナの身体に突然変化が訪れた。
「……え？」
とろり――。太腿を、熱いものが流れ落ちる。淫裂から溢れた粘液が、甘いにおいで身体を包む。
「あぁ……ああっ⁉　お腹が……どうして？　こんな……！」
フィオナは知っていた。身体の芯が燃えそうな、熱く切ない感覚を。
「ほほう。恥ずかしくて感じるとは、やはりお前は、とんでもない淫乱だ」
「ち、違います、そんなはずは……そんな……はぁっ！」

だが、言葉とは裏腹に腰が波打つ。我慢、できない。陰唇が蠢き、涎を垂らしながら吸いつくようにペニスを舐めしゃぶる。
「お前は羞恥や屈辱で感じるマゾ変態だ！　遠慮することはない！　その快楽に身を任せろ！」
「うそ……うそですこんな……あぁでもッ、でも……ッ！」
否定、できない。焦燥に似た快感が身体を駆け巡る。もどかしげに振られる腰が、意に反して肉棒との甘美な摩擦を欲しがる。貪る。
「ち、違うのッ。わたくしは、そんな淫らな女じゃ……んむぅ⁉」
ヒキガエルのように薄い唇が押しつけられた。不意を突かれ、舌の侵入を許してしまう。流れ込む臭い唾液に胃液が込み上げる。それなのに、ざらつく舌同士が触れあうと、背中をゾクゾクと悪寒のような快感が走った。
（うそよ……！　こんなの、気持ち悪いだけ、なのにぃ……っ！）
恥辱のキスがたまらない。彼の首にしがみつく。恋人の接吻のように、熱く喘ぎながら唇と舌を擦りつける。嫌悪は快感へとすり替わり、犯されているはずの性器も淫蜜を垂れ流す。
「はっ、ひぃぃぃっ！　おちんちん、おまんこ擦って、奥、当たって、腰止まらな……はひぃぃあぁぁッ‼」
自分の身体を制御できない。意味不明の言葉を叫びながら、大胆に腰を振る。キスから

零れた唾液が乳房の谷間に落ち、くすぐったさで頭が痺れる。
「やはりお前は淫乱な牝犬だ！　犬に似合いの格好にしてやろう！」
ぐいっと身体が持ち上げられた。かと思うと、挿入された肉棒を軸に身体が百八十度反転する。
「ひッぎぃぃぃっ⁉」
膣肉が捻れ、鮮烈な快感が脳髄を直撃した。快感を整理できないままテーブルに乗せられ、四つん這いの、まさに犬の格好で犯される。
「こ、こんな格好……やぁぁぁ」
視線を感じる。見られている。男たちばかりか、犯されている少女たちまでが、悶えるフィオナを侮蔑の目で。
「ほうれ。皆見ておるぞ。淫乱でチンポ好きのお前の姿を」
（ああ、違うの……見ないで……！）
屈辱で頭が沸騰しそうだ。なのに、まるで、牡を交尾に誘うように、背中や腰が熱く蕩けて卑猥に波打つ。
「ほれほれ、どうした。お前はワシを射精させなければならんのだろう⁉」
（あ、ああん！　そ……そうだ、わたくしは彼を絶頂させなければ……）
だが何のためにか思い出せない。ただなぜか、無闇に彼の精が欲しい。
「は、早く出してぇ……。精液、わたくしの膣に……早くぅ」

媚びたような甘い声で、淫語を吐くのも気持ちいい。お尻から突かれる度に身体は熱く蕩け、理性がどこかに飛んでいく。
「出して！　精液出してぇ！　オマンコに、いっぱい欲し……ひぎィッ!?」
両手首をグッと引っ張られた。膝立ちになったせいで括約筋が締まり、勃起が恥穴を圧迫する。膣ヒダを削ぐようなカリ首との淫摩擦が、忌まわしい膣内射精の記憶を恍惚に塗り替える。
「ひぁぁッ、すごひぃ！　精液、精液ちょうらい！　あなたのあちゅい精液でわらくひを孕ませてぇッ！」
だが快感によがるフィオナの耳に、悪魔の声がささやきかけた。
「ふははッ！　いいぞフィオナ！　さすが、妊娠薬を飲んだだけはある」
「――ッ!!」
一気に顔が青ざめる。自分は何をしているのだ。何を口走ったのだ。そして、フィオナは知った。グラスに刻まれたイセリアの紋章――あんな単純な罠にかかった自分の愚かさを。
「ち、違います……今のは……！」
「選んだのはお前だ。イセリアの誇りとともに、ワシの子を孕めッ！」
抽送が急加速した。ぐじゅぐじゅと恥蜜を撒き散らしながら、ペニスの味を知ってしまった恥裂をえぐり突く。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!
キルタイムのアダルトコミック誌!
業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!
二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE
催眠
応募すれば絶対貰える!
催眠ソフトプレゼント!!
偶数月
17日発売
魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!
コミックUNREAL
発射準備は、できましたか?
提督♥
奇数月
12日発売
KTCといえば闘うヒロインアンソロ!
メガミクライシス
MEGAMI CRISIS
Vol.14
神保玉蘭
ハーレムウェディング
対魔忍アサギ2
高浜太郎
奇数月
下旬発売
強く美しいヒロインが
ちに堕ちまくるアンソロジー!
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて!
キルタイム
検索
Click
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。